

本の街・神田神保町の再生

柴田 信*

はじめに

本の街・神田神保町の歴史は古く、書肆街として形成されて（1906年には106軒の書店ができていた）からも、一世紀を越えています。最近の調査によれば、現在、神保町には33の新刊書店、141の古書店が軒を並べ、出版社・出版プロダクション・取次店・印刷・製本業者を加えると382の事業者が出版関連の仕事に関わっているのです。隣接する一ツ橋・駿河台・小川町・猿樂町・三崎町・錦町・西神田等をいれますと事業所の数は724にも及びます。（第一通信社調べ）まさに本の一大コンビナートの様相を呈しており、東京千代田区の地場産業と言われる所以もそこにあります。

しかし、こういった世界的にも稀有な本の街・神保町に、このところ活気が見られません。勿論、これは神保町だけのことではなく、長期に亘る出版業界の不況が、この特色ある本の街にも及んでいるということです。そして特に、新刊書店に限ってそれは顕著です。取次ぎ大手の日販から出ている2006年版書店経営指標によれば、出版物の売上高が9年連続の前年割れとか、つまり、マイナス成長が9年も続き、中小の書店の数も最盛時から半減しているとあります。全国的な指標や統計もさることながら、この本の街にしぼってみても、むしろ平均値を越えて不況感はひとしおです。事実、神保町にある私の店の実感からも、又、新刊書店や古書店の仲間内で話していても、この地域全体の落ち込みは、尋常ではないと思えるのです。秋葉原・丸の内と再開発が進む周辺地域に、一步も二歩も遅れをとった感

*しばた・しん／有限会社信山社 岩波ブックセンター 代表取締役

のある本の街・神保町を、どう再生させていくのか、どうやら正念場がきているようです。

今、神保町には本にこだわりながら、街の再生を願って活動を続ける、若しくは活動しようとする組織や団体が数多くあり、又、それを支援するグループも次々と生まれています。神保町周辺の古書店や新刊書店のそれぞれが、街の再生に向けて懸命になるのは当然ですが、加えて地元の大学や商店会、そして区役所などの公的な機関でも関心が高く、このところ公私を横断しての気運の盛り上がりが一層感じられます。本稿ではこれら数々のグループの中から、現在もっとも突出して活動している旬な集団を、三つ採り上げたいと思います。

一番目は街の代表的イベントとして半世紀近い実績をもつ「神田古本まつり」と、16年前に同時開催として途中参入した「神保町ブックフェスティバル」の成功です。このイベントの現在の盛況は私達に大きな自信を持たせています。

今年（2006）の秋の読書週間は10月27日からでした。7月に制定された「文字活字文化の日」と重なります。普段は出版業界の不振と連動し、ちょっと元気に欠ける街ですが、この時期に限って、我が神保町界限は最高の賑わいをみせます。特に今年は「東京名物・神田古本まつり」が一段と規模を拡げ、路地から表通りに進出、それに開催期間中の土日を使って、新刊を中心にした「神保町ブックフェスティバル」も加わりますから、都内は勿論のこと、首都圏各地から活字信仰の多くの人達が集まります。晴天6日間、盛大な本のお祭りです。このように、一時的にせよ、沈滞気味の神保町が本の街らしく活況を呈するのは、古書と新刊書との、祭りの中でのコラボレーションの成功にあったと独断します。思えば47回を迎えた伝統の「古本まつり」に、新刊書店の「神保町ブックフェスティバル」が参入したのは、16年前の1991年、第32回の古本まつりからでした。始めは様子見気味の商店会の人たちも、3年目には個々の店の殆んどが参加するようになり、お祭りにいっそうの厚みが増していきました。以来、年を重ねて16回、今日の盛況につながっているのですが、この一過性のお祭りの盛り上がりやを、日常的または恒常的な姿につなげて行きたいというのが私達

の悲願でもあります。

【閑話休題】

神保町ブックフェスティバルのオープニングパレードは例年、地元の明治大学応援団が吹奏楽部の演奏によって会場を行進します。そういえば、第4回だったでしょうか、パレードの隊列の先頭に、当時の学長、故岡野加穂留先生が加わり、地元のお祭りをおおいに盛り上げて下さいました。今年も又、先頭は学長の納谷廣美先生でした。

二番目は、町情報の充実を目指して進行中の、インターネット関連の動きです。それは本の街・神保町のポータルサイト「BookTown・じんぼう」の拡充と進化です。「国立情報学研究所（Nii）高野研究室」の協力もあって2年前に生まれました。ジャンル別古書店案内「ジンボウナビ」、古書店の在庫を一括検索のできる「古書データベース」、本の街のイベント案内等々が掲載されています。加えて新刊書店の在庫情報や地域の大学図書館、そして、公共図書館の各種情報の開示まで視野に入れ、更なるバージョンアップを計りながら、街情報の核づくりを目指しています。また、書店や喫茶店の店頭で端末をおいて来店客が自分で操作できるようにと準備・進行中です。

そして、これに呼応するかのように、新刊書店では街の旗艦店である三省堂書店と専門書の専門店として位置づけられる岩波ブックセンター信山社とが在庫データを共有し、本を探す顧客に互いの店を紹介しあうサービスを始めました。三省堂のシステムに岩波ブックセンターが参加、目当ての本を検索すると三省堂の各フロアと岩波BCで、それぞれの在庫がひと目で分かり、自店で在庫がなくても相手店舗に在庫がある場合は、連絡して取り置いてもらうという仕組みです。ライバル店同士なのに、顧客の利便性を最優先に考えた画期的なサービスとして、新聞・テレビ・ラジオにも採り上げられかなり好評だったようです。双方の経営から見れば、個々の店の利害よりも、来店客を地域で囲い込み、顧客のパイ自体をひろげる効果のほうが大きいと判断しているわけです。そして更に新刊書店の仲間を助け、前述のように進化する「BookTown・じんぼう」の一角に新鮮な在

庫情報を提供し、連携を確かなものにすることを目指しています。

おしまいは前の二つのグループとはおもむきが違います。2007年3月を目標に、神保町の町おこしという観点から、街づくりの提案をしようと意気込む調査・研究のサークル(NPO 神田学会+インターユニバーシティ神田)です。NPO 神田学会と神保町周辺の5大学(明治・日本・法政・共立・東京電機)とが協同し、既に精力的に活動しております。案内のチラシによれば、<この活動は平成18年度の全国都市再生モデル調査の対象となった「本のまち神田神保町『まちの図書館』構想づくり調査」に基づき、9ヶ月にわたり神保町および周辺地区のまちづくりについて調査し提案するというもの>で、その一環としてさまざまな切り口から神保町について学ぶ公開セミナーやシンポジウムを開催、今、進行中です。11月7日に行われたシンポジウムでは、5大学による中間報告として「靖国通り環境色彩調査」の発表があり学生達の熱気が会場に伝わりました。若い学生達の新しい提案に期待が膨らみます。

現在、活動を続けている三グループについて述べてきましたが、他にも規模の大小にかかわらず、神保町に対する思い入れをもって活動している団体も少なくなく、その活躍は多岐にわたります。神保町の行事に協力的な千代田区の外郭団体「まちみらい千代田」、また、最近では「神保町応援隊」というボランティアグループも出現しました。更に、街を紹介するタウン誌では「雑誌かんだ」・「本の街」・「おさんぽ神保町」・「ルネッサンス神田」等々があり、ネットの世界でも、今、好評の「ナビブラ神保町」また、ブログで「神保町再生プロジェクト」が更新を重ねています。こうして街の動きを俯瞰的に見てきますと、本の街・神保町の再生に向けての気運の高まりが実感でき、まさに「機、熟せり」の想いがしきりです。

【閑話休題】

今年の7月、神保町に寄席と映画の「神保町花月」が誕生するそうで、工事現場のすずらん通り裏に行ってみますと今や工事の真っ最中、まだまだお祭りは続きそうです。

おわりに

私達は「本の街・神保町を元気にする会」を2006年12月に設立しました。古書店や新刊書店に周辺の大手出版社を加えた強力なグループです。始まりは有志5・6人の雑談からで、それは「神保町の元気は出版界の元気に通じる」とばかりに大上段にふりかぶった放談会でした。それもこれも前述した様々なグループの、活動のエネルギーが私達を元気にさせたからに違いありません。そういえば前述したように、2007年3月には（NPO 神田学会＋インターユニバーシティ神田の）5大学の学生さんから、調査・研究を踏まえた町おこしの提案も出てきます。その提示された中味の受け皿として、問われているのは実は私達なのです。

「本の街・神保町を元気にする会」の趣意書によりますと、この会は街の再生を比較的長いスパンで捉えようとしています。そしてその主な活動は次の三か条です。それを提示してこの稿を閉じたいと思います。

- 一 神保町に関する情報の一元化（当面は「BookTown・じんぼう」を中心に情報をまとめ、いずれインターネット上での集約に発展させたい）
- 一 街全体のインフラ整備（地図設置や、飲食店、喫茶店情報など多くの人々が歩きやすい優しい環境づくり提言）
- 一 本に関する企画・イベント（編集長講演会・講座等出版会との連携をふくむ）

以上